

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

哲学において師は弟子をどの程度まで コントロールできるか —レオ・シュトラウスの場合¹⁾—

飯島昇藏

(早稲田大学政治経済学術院教授)

In the normal and most interesting case, the philosopher studied by the historian of philosophy is a man by far superior to his historian in intelligence, imagination, and subtlety. ----- Leo Strauss (1944)

1. 問題の発端

ウィリアム・E・コノリーは彼の著作『プルーラリズム』の第2章においてレオ・シュトラウス (Leo Strauss, 1899-1973) の政治哲学の批判を展開している²⁾。というよりもむしろ、厳密に言えば、邦訳の「訳者あとがき」にも記されているように、その章では「アメリカで有力なレオ・シュトラウス系の理論家たちを槍玉に挙げ、彼らの多元主義批判に再反論を試みつつ、コノリーは同時に、自らの多元主義と相対主義との違いをも明確に」しようとしている³⁾。

この章の原型の少なくとも1つは、2004年夏、立命館大学において開催された「アメリカ研究学会」でのコノリーによる「プルーラリズム」という本書のタイトルと同名の基調講演であると思われる。そのとき筆者はたまたま彼の基調講演に対するコメントターの1人として、講演後の質

疑応答に参加した。「シュトラウス系の」理論家たちやメディアへの登場人物たちに対するコノリーの舌鋒があまりにも鋭かったのと、彼らに対するシュトラウスの影響と、そしてこのゆえにシュトラウスの責任とを追究するかのよな彼の論調にいささか不満と疑問を禁じえなかった筆者は、簡単に言えば、「教育者はその教え子の思想と行動とに対して責任を取りうるのか」という趣旨の質問をした。その問いに対してコノリーが躊躇することなく「然り」と明確に答えたのには、さらにびっくり仰天した。

直前のパラグラフで、教育者はその教え子の思想と行動とに対して責任を取りうるのかという趣旨の質問をしたという、いささか曖昧な表現をした理由は、筆者がコノリーに対して英語で何と質問したのか今では正確には覚えていないからである。しかし、そのときのコノリーとの質疑応答は、シュトラウス自身が生前に公表した著述と、その教え子たち（の教え子たち）がシュトラウスの死後に彼に関連して編んださまざまな種類の著述との関係について筆者が日ごろ疑問に感じていたことを主題化するきっかけになった。

たしかに教師は、さまざまな形で、意図すると意図せざるとに拘わらず、その教え子たちに影響を与えることがあるだろう。しかし、本稿で考察したいのは、教育における教師と生徒のそのような一般的な影響関係ではない。「哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか?」という本稿のタイトルが強調しようとするのは、(1)「師」とは一般の教師、教授、先生などとは区別対照される存在として、(2)「弟子」とは生徒、学生、読者、聴講者などとは区別対照される存在として規定され、真理の探究とその伝達における「師」と「弟子」の関係の密度が重要視されている。そして(3)「コントロール」という用語は単なる「影響の（直接的ないし間接的な）有無、影響の行使」などとは区別されて使用されており、とりわけ師の側における強い意志の存在が前提にされている。

なるほど、知恵を愛する者の、すなわち、知恵の探究に専念する哲学者の重大な階級的利害関心の1つが1人に放って置かれることであるとして

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

も、そのような哲学的探究の営みが単なる狂人の営みとは質的に区別されているという保証を獲得することのためだけでも、哲学者は自らと類似の自然 nature をもつ他者を必要とする。そのような哲学者と哲学者たち（あるいは潜在的哲学者たち）の集まりとその哲学的営為は、シュトラウスの場合には、自己の学派 school の形成へと導いていった。

1964年にジョゼフ・クロプシイが編纂した、シュトラウスの65歳を祝う記念論文集『古代人たちと近代人たち：政治哲学の伝統についての諸試論』*Ancients and Moderns: Essays on the Tradition of Political Philosophy*, ed. Joseph Cropsey (New York: Basic Books, 1964)を『アメリカ政治学会誌』において書評したウィルモア・ケンドール (Willmoore Kendall, 1909-1967)は、「政治理論の領域の専門家たちの語彙の中に、近年、新しい名詞“Straussian”が入ってきた」という文章をもって開始している。ケンドールはさらにその用語が形容詞としてもまた使用されうることを指摘している。そして彼は、その名詞とその形容詞とが必ずしも対称的 symmetrical ではないことに注意を促し、その証左として名詞 Straussian とは異なり形容詞 Straussian がいくつかの重要な異なる意味をもっていることを示している。われわれの目的にとって重要なことは、当時すでに形容詞 Straussian が、1つの「学派」を形成するところまで成長してきたシュトラウスの政治哲学の影響を外部の第3者が示すために使われだしている、というケンドールの理解である⁴⁾。

他方においてシュトラウス自身は、アレクサンドル・コジェーヴ (Alexandre Kojève, 1902-1968)との論争の中で、現代において正真正銘の哲学的営為を擁護するためには哲学者たちが自分たちの集団、階級を形成すべきであると示唆している。しかもその集まりは「文芸共和国」the republic of letters のような、多種多様な主義・主張を包含する、相互に寛容な集いではなく、「セクト」でなければならないとしている⁵⁾。シュトラウス自身が「学派」という用語ではなく、むしろその用語よりもさらに集団構成員間の凝集力の強さを含意する「セクト」という用語を使用し

ている事実からは、哲学を守るためには師は弟子たちに単に影響を与えるという次元を超えた、師の側における弟子たちに対する知恵の探究における導き、指導、さらにはコントロールをしなければならないという強い意志の存在が感じ取られるのではないであろうか。しかし、そのようなコントロールは、師の生前にはある程度まで実行可能であるとしても、師の没後においてはどのようなのであろうか。シュトラウスの没後に弟子たちによって編集され、出版された彼の講演や著述のいくつかの巻を検討することによって、この問題に接近してみよう。

2. シュトラウスの死後に弟子たちによって編集・公刊されたシュトラウスの論文・講演・書簡などをめぐって

このセクションにおいては、シュトラウスの弟子たちによって編集・公刊された、次の6つの種類の著作群が取り上げられ、検討される：(1) 4種類の『僭主政治について』 *On Tyranny*、(2) H・ギルデインの編纂による2つのシュトラウス政治哲学論集、(3) レオ・シュトラウスとジョゼフ・クロプシイ編著『政治哲学の歴史』第3版(1987年)、(4) トマス・パンゲル編『古典的政治的合理主義の再生』(1989年)、(5) ケネス・ハート・グリーン編『ユダヤ哲学と近代の危機』 *Jewish Philosophy and the Crisis of Modernity: Essays and Lectures in Modern Jewish Thought by Leo Strauss* (1997)、および(6) ケネス・ハート・グリーン編『レオ・シュトラウスのマイモニデス論：全著述』 *Leo Strauss on Maimonides: The Complete Writings*. Edited with an Introduction by Kenneth Hart Green (The University of Chicago Press, 2013)。

(1) まず4種類の『僭主政治について』から始めよう。著者は4つの異なった版すべてにおいてレオ・シュトラウスであるが、それらの版のフル・タイトル、出版社、出版年、編者、コピーライトはそれぞれ以下のように変化している。

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

- (a) *On Tyranny: An Interpretation of Xenophon's Hiero*; with a foreword by Alvin Johnson [The Free Press, 1948].
- (b) *On Tyranny*, Revised and Enlarged [The Free Press of Glencoe, 1963], [Cornell Paper Backs, 1968].
- (c) *On Tyranny*, Revised and Expanded Edition, Including the Strauss-Kojève Correspondence, Edited by Victor Gourevitch and Michael S. Roth [The Free Press, 1991].

Copyright ©1991 by Victor Gourevitch and Michael S. Roth

Copyright ©1963 by The Free Press A Division of Macmillan, Inc.

- (d) *On Tyranny*, Revised and Expanded Edition, Including the Strauss-Kojève Correspondence, Edited by Victor Gourevitch and Michael S. Roth [The University of Chicago Press, 2000].

Contents (目次) の表記は、後に明らかになるように、1991年度版とまったく同一であるが、(d)には ©1961, 1991, 2000 by the Estate of Leo Strauss という記載がある。

次に、内容に関する変化であるが、(a) の版から (b) の版に変わったのに伴い、とくに *On Tyranny*, Revised and Enlarged [Cornell Paper Backs, 1968 [以下においてはコーネル大学版と略記する]] において、アルヴィン・ジョンソンによる「クセノフォンとシュトラウス博士について」“On Xenophon and Dr. Strauss” という「前書き」foreword に代わって、アラン・ブルーム (Allan Bloom, 1930-1992) による「前書き」が置かれるようになったこと、そしてサブ・タイトルが削除されたことは注記されるべきである (サブ・タイトルに含まれていた An Interpretation という用語は非常に重要であるように思われる。なぜならば、シュトラウスによるクセノフォン3部作の最後の著作のサブ・タイトルもまた An Interpretation という用語を含んでいるからである)。(a) の版の内容 (目次) の表記は単純で非常に美しい。

TABLE OF CONTENTS

Introduction	1
I. The Problem	8
II. The Title and the Form	10
III. The Setting	15
A. The characters and their intentions	15
B. The action and the dialogue	28
C. The use of characteristic terms	47
IV. The Teaching Concerning Tyranny	50
V. The Two Ways of Life	63
VI. Pleasure and Virtue	80
VII. Piety and Law	92
Notes	95

他方において、コーネル大学版 *On Tyranny* の内容（目次）は以下の通りである。

FOREWORD V

XENOPHON'S *Hiero or Tyrannicus* 1

On Tyranny 21

ALEXANDRE KOJÈVE *Tyranny and Wisdom* 143

Restatement on Xenophon's Hiero 189

INDEX 227

さて「前書き」においてブルームは、シュトラウス教授が独力で singlehandedly 「古代政治思想の真剣な研究を再生し、それが単なる歴史的好奇心のための対象ではなく、われわれの最も死活的な現代の諸利害関心にとって有意であることを示した」と評価しているだけでなく、さらに、

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

その研究にとって中心的であるのは「古典的哲学者たちの教え teaching を伝達するテキストへの関心 concern」であると指摘している。そしてブルームは、師の考え方を踏襲するかのような口吻で、「古代人たちの知恵は適切な性向 dispositions をもっている人びとにだけ開示される」と述べ、「これらの性向は本書によって勇気づけられるが、本書は解釈者にとって必要な注意と尊敬のモデルである」と述べている。そして、本書の意義を「ある教説 doctrine を提示するというよりもむしろある探究のための道を準備する」点に見出している。

次にブルームは本書がシュトラウス氏の論議 argument を読者が辿ることができるようにすべく、『ヒエロン』の直訳（逐語訳） a literal translation を含んでいると断っている。シュトラウスの解釈はクセノフォンの叙述のあらゆる細部を真剣に受けとる注意深いテキスト分析に基づいているが、ブルームによれば、当時入手可能な英語の翻訳はそのような前提には立っていないので、読者はシュトラウスがテキストの中の何に言及しているかを理解できないというのである。新しい翻訳は Agora Paperback Editions の編集者たちによって（ブルームは当時その編集責任者 General Editor であった）委嘱されたものであって、シュトラウス自身はそれに対しては何の責任もないとされる。編集者たちは、その逐語訳がシュトラウスがテキストに対して払った注意 care を反映しており、読者をして同じような注意を払うことが可能になることを期待しているというのである。

本書はさらに「僭主政治についてのクセノフォンの理解の十全性に関してレオ・シュトラウスとアレクサンドル・コジェーヴによって遂行された論争 debate」を含んでいるが、その理由は、コジェーヴが「ヘーゲルの最も深遠な研究者 student」であり、このゆえに、本書において批判されている、人間の事柄および政治的事柄についての歴史的 historical ないし歴史主義的 historicist 見解の最も真剣な層 stratum を代表しているからであり、シュトラウス教授が古典的教えを提示するのはまさにこの見解に対

する応答としてなのであるからである。ブルームによれば、論争されている問いは、人間の自然 human nature が不変であるか否かであり、そして哲学は歴史的なもの the historic から恒久的なもの the permanent へ移ることができるか否かである。

おそらくブルームによる英語圏の読者へのコジェーヴについての簡単な紹介の中で（今日においてなおさら）最も論争的でしかも最も重要な部分は次の文章であろう。「しかし、ヘーゲルの体系は、自然科学と歴史は言わずもがな、シェリング、キルケゴール、およびニーチェによって論駁されてしまったという実践的に普遍的な合意があった時代にあつて、彼〔コジェーヴ〕だけが、適切に理解されたヘーゲルの体系こそが真の最終的哲学的教えである、と敢えて強く主張したのである；彼は、19世紀後半の伝統的ヘーゲル主義と『ネオ・ヘーゲル主義』の両者とは区別対照される、もともとのヘーゲル the original Hegel を回復したのである」。シュトラウスが対質したヘーゲル哲学はコジェーヴによって歪められたそれであるという批判はわが国においてもかなりあるように思われる。しかしそのような批判は、ブルームによれば、シュトラウスにおいてすでに織り込み済みの批判でしかない。

On Tyranny のコーネル大学版はシュトラウスが存命中に出版されたが、それをシュトラウス自身はどのように評価したであろうか。筆者は1980年代前半のシカゴ大学留学時代に本書を初めて入手した。その読後感は、シュトラウスとコジェーヴの議論が複雑であり、それを理解するのは自分の能力をはるかに超えるというものであった。しかし1つだけ強い印象あるいは疑問ないし不満が残った。それはブルームによる「シュトラウス-コジェーヴ論争」という本書の把握への違和感であった。たとえシュトラウスとコジェーヴの論文から主に構成されている本書が2人の哲学者の間の「論争」であるとしても、その論争は公平な論争では断じてないというのが筆者の不満であった。なぜならば、クセノフォンのテキストをめぐるシュトラウスには2度の発言の機会が与えられているのに、コ

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

ジェーヴにはたった1度の発言の機会しか与えられていないのだから。そのような筆者の疑念は、2人の間の往復書簡を含んでいる第3番目の種類の *On Tyranny* の公刊によってようやく氷解することになる。

On Tyranny のコーネル大学版から (c) の版への変化はあまりにも劇的である。それらの大きな変化のいくつかを挙げれば、編者が交替したこと、シュトラウスとコジェーヴのそれぞれの写真が一葉ずつ掲載されたこと、シュトラウスとコジェーヴの生前の往復書簡が英語で新たに含められたこと、そしてクセノフォンのテキストのマーヴィン・ケンドリックによる英語訳がゼス・ベナルデットによる修正を施されたことである。それらの変化に伴い、目次の表記も、以下に示すように、きわめて複雑となっている。

Contents

Preface and Acknowledgments	vii
Introduction	ix
I. On Tyranny	1
<i>Xenophon: Hiero or Tyrannicus</i> . Translated by Marvin Kendrick; revised by Seth Benardete	3
<i>Leo Strauss: On Tyranny</i>	22
Notes on Tyranny	106
II. The Strauss-Kojève Debate	133
<i>Alexandre Kojève: Tyranny and Wisdom</i>	135
<i>Leo Strauss: Restatement on Xenophon's Hiero</i>	177
III. The Strauss-Kojève Correspondence	213
Letters	217
Editorial Notes	315

Name Index	327
Subject Index	333

他方において、*On Tyranny* の (c) の版から (d) の版 (the University of Chicago Edition [以下においてはシカゴ大学版と略記する]) への変化は量的にはきわめて僅かであり、目次の表記にはまったく変化はない。ただし、目次にはあらわれていない、非常に短い Preface to the University of Chicago Edition によれば、編者たちは、シュトラウスの「再陳述」“Restatement” を彼がそれを著述したように復元することができたことを喜んでいる。

さてシュトラウス没後における弟子たちによる *On Tyranny* の修正・増補版 (あるいは拡大版) の出現をわれわれはどのように評価すべきであろうか。それ以前の版の読者にとっては未知・未見のさまざまに重要な種類の情報が沢山提供されるようになったことをもって、無条件に歓迎すべきこととすべきであろうか。ここでは、拙稿「[クセノフォン-シュトラウス-コジューヴ]本としての『僭主政治について』」(「訳者あとがき」『僭主政治について』(下)現代思潮新社、2007年、325-350頁)を利用しつつ、それを少し敷衍する形で現時点での私見を3点ほど記すことによって、このサブ・セクションを閉じたい。

筆者はまず、1948年に初版が出版されたときには、本書は文字どおりシュトラウス自身の『僭主政治について』*On Tyranny* ということができしたが、1954年にフランスのガリマール (Gallimard) 社からそのフランス語訳が刊行されて以降はもはや厳密な意味においてはシュトラウス自身の本と呼ぶことはできず、むしろシュトラウス自身がコジューヴへの手紙の中で用いている表現を使えば、「クセノフォン-シュトラウス-コジューヴ」本 “The Xenophon-Strauss-Kojève” book とでも呼ばれるべき書物に著しく変質していたという事実を確認した (下巻 (326頁)) が、筆者のこの最初の認識は今でも基本的に変わっていない。

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

ここで少し寄り道をして、フランス語版 *De la tyrannie* に関して若干留意すべき点を記しておきたい。まず、本書には、いかなる種類の索引 Index も付されていない⁶⁾。次に、本書からは、すべての種類の英語版の本文の最初に（すなわち、「導入」Introduction の直前に）掲げられているマコーレイ (Macaulay) からの引用が削除されている。その引用は “The habit of writing against the government had, of itself, an unfavorable effect on character” という文から始まっている。1950年9月14日付けのコジェーヴ宛の手紙の中でもシュトラウスがその引用をフランス語版においても掲載すべきだと強く主張しているにも拘わらず、なぜフランス語版からは、本書を読み解くための鍵ないしヒントを提供しているかもしれない、このモットー的引用が削除されているのかの理由を、筆者は今もって理解することができない⁷⁾。第3に、シュトラウスの “Restatement” は «Mise au Point» traduit par Hélène Kern としてガリマール版に収録されているが、それが *What Is Political Philosophy? and Other Studies* (The Free Press, 1959) に再録された後には、1992年にそのフランス語訳の中に «*A props du Hiéron de Xénophon: Mise au point*», traduit par Olivier Sedeyn, *Qu'est-ce que la philosophie politique ?* (Presses Universitaires de France) として収録されている。最後に第4に、フランス語版 *De la tyrannie* に対するシュトラウス自身の評価はどうであったであろうか。1954年4月28日付けのコジェーヴ宛の書簡の中でシュトラウスは次のように綴っている。「私は私たちの本 (our book) を受け取った。私の sections の翻訳をみたが、非常に満足する部分もあれば、あまり満足しない部分もある」(強調は引用者のもの)。フランス語版 *De la tyrannie* の企画の段階から、当時入手可能であった、クセノフォンのギリシア語のテキストのフランス語訳の不適切さはシュトラウスを多に悩ませた問題であった。その書物が上梓された後には、彼はさらに彼自身の英語論文のフランス語訳にも不満を表明しているのである。

さて、1954年に *On Tyranny* のフランス語訳が刊行されて以降はもは

や厳密な意味においてはそれはシュトラウス自身の本と呼ぶことはできず、むしろ「クセノフォン-シュトラウス-コジェーヴ」本とでも呼ばれる書物に著しく変質していたことはすでに指摘した。しかし、さらに精密にいえば、フランス語版は「クセノフォン-シュトラウス-コジェーヴ-シュトラウス」本への変質を意味したのである。そしてこのさらなる変質は、コジェーヴがシュトラウスの懇願に応じてシュトラウスの“Restatement”への“Reply”を書いていたならば、「クセノフォン-シュトラウス-コジェーヴ」本への変質に留まっていたのであり、いわゆる「論争」は本当の意味で公正な論争となりえたであろう。

以上の検討を踏まえて、*On Tyranny* の4つの異なった版をめぐって問題提起的に4点を総括してみよう。第1点目は、シュトラウス自身の真正正銘の *On Tyranny* をそれ自身として評価しなくてよいのかという決定的に重要な問題に関連する。のちにシュトラウスは『迫害と著述の技法』の第3章で、たとえばマイモニデスにおける1人称単数形の代名詞と1人称複数形の代名詞の用法の差異の重要性に触れており、さらには“my treatise”と“our great work”とのマイモニデスによる使い分けに注意を促すようになる⁸⁾。前者がいわば潜在的哲学者に語りかける、戯れや遊び心にみちた playful 私的な書物であるのに対して、後者はユダヤの民全体を政治的・道徳的に導いていこうとする真剣な serious 公的な書物であることを2つの異なった種類の1人称代名詞は示唆しているというのである。マイモニデスの書物に妥当することは、シュトラウス自身の書物にも妥当するのではないか。

第2点目は、一方における1968年のコーネル大学版の編集方針と、他方における1991年版および2000年版の編集方針の決定的な差異に関係する。邦訳『僭主政治について』の「訳者あとがき」において筆者は後者の編集方針について次のような否定的な評価をくだしていた。筆者は「本書の編者たちの編集方針と責任によって『シュトラウス-コジェーヴ論争』という表題〔タイトル〕のもとに、コジェーヴの『僭主政治と知恵』とシュ

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

トラウスの『再説〔再陳述〕』の2つの論文だけがこの順序で『第2部』に収録されている事実が、これ以後2人のあいだの『論争』が本書の『第2部』に限定されて解釈されたり、議論されたりする傾向を助長させないか非常に危惧するものである」(邦訳『僭主政治について』(下)、333頁)。

第3点目は、上述の第2点目の論点とも密接に関連するが、シュトラウスの「クセノフォンの『ヒエロン』についての再陳述」はコジェーヴからの批判にのみ答えているわけではないという重大な事実を、編者たちによる「シュトラウス-コジェーヴ論争」という括り方(目次の設定)は隠蔽してしまう危険があることに関係する。具体的には、この「再陳述」は、シュトラウスが同時代の指導的な政治思想史家の1人とみなしたエリック・フェーゲリン(Eric Voegelin, 1901-1985)による*The Review of Politics*(1949, 241-244)誌上の書評に対する真剣な応答も含んでいる。コジェーヴの「僭主政治と知恵」がかなり長大な論文であるのに対して、フェーゲリンの書評は僅か4頁あまりである。しかるにシュトラウスは、彼自身の38頁の論文のうち8頁をフェーゲリンへの応答に割いているのであり、この事実だけからしてもフェーゲリンの問題提起の重要性をシュトラウスは明確に認識していたと言えるであろう。

「再陳述」においてシュトラウスが取り上げるに値する、すなわち反批判するに値する論評とみなしたのは、僭主政治についてのクセノフォンなどの古典的概念があまりにも狭く、そしてこのことから古典的参照枠は根源的に変更されねばならない、すなわち放棄されねばならないという批判である。換言すれば、古典的社会科学を復興しようとするシュトラウ斯的な試みは、古典的方向づけが聖書的方向づけの勝利によっても時代遅れのものとなってしまっていないことを含意しているので、それは「ユートピア」ではないかという批判である。このような批判の代表者としてフェーゲリンとコジェーヴの2人だけが挙げられているが、前者の批判に対するシュトラウスの反批判の中では、ここではとくに次の点の重要性のみを指摘しておこう。「共和主義的な立憲的秩序の最終的崩壊」の後

にのみ出現するカエサリズム Caesarism、すなわち「後-立憲的」post-constitutional 支配という現象をクセノフォンによって代表される古典的参照枠は扱っていない、そしてこのゆえに扱えないというフェーゲリンの批判に対するシュトラウスの興味深くも慎重な応答の仕方である。少し長いが次のパラグラフを引用しておきたい。

「古典的作家たちは、カエサリズムの諸長所を正当に扱うことが完璧にできたのに、彼らはとくにカエサリズムの教説をわざわざ作りあげることに関わっていなかった。彼らは最善の政体に第一次的に関わっていたので、彼らは「後-立憲的」支配、すなわち後期王政よりも、「前-立憲的」支配、すなわち前期王政のほうに注意を払った：田舎の単純さのほうが、洗練された墮落よりも、善き生のための善き土壌である。しかし、それとは別に、古典的作家たちを「後-立憲的」支配についてほとんど沈黙するよう誘導した理由があった。立憲的支配を絶対的支配に取って代えることは、もしも共通善がそうした変化を要請するのであれば正当である、という事実を強調することは、その確立されていた立憲的秩序の絶対的神聖さに疑いを投げかけることを意味する。それは、危険な人間たちに、共通善が彼らの絶対的な支配の確立を要請するような事態を惹き起こすことによって争点を混乱させる勇気を与えることを意味する。カエサリズムの正統性の真の教説は、危険な教説である。カエサリズムと僭主政治との間の真の区別は、通常の政治的使用にとってはあまりにも微妙すぎる。人民にとっては、その区別は無知なままであり、そして潜在的なカエサルを潜在的な僭主とみなしているほうが善い。いかなる害もこの理論的誤謬から出てくることはありえず、それは、もしも人民がそれにもとづいて行動する気質をもつならば、1つの実践的真理 a practical truth となるのである。いかなる害もカエサリズムと僭主政治との政治的同一視から出てこない：カエサルたちは彼ら自身の世話をすることができる」⁹⁾。

危険な問いに対する沈黙が単なる無知や蒙昧ではなく、いわば遠謀深慮

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

の所産、賢慮の結果であり、理論的誤謬が実践的真理になりうるという、(古典的社会科学における)理論と実践についてのシュトラウスの独得な理解を、われわれはフェーゲリンに対するシュトラウスの反批判から学ぶことができるのである。

(2) 次に、H・ギルディン (Hilail Gildin) によって編集され、序論が付されたシュトラウスの政治哲学についての次の2つのアンソロジーの問題点を検討してみよう。

(e) *Political Philosophy: Six Essays by Leo Strauss* (Bobbs-Merrill Company, Inc. 1975).

(f) *An Introduction to Political Philosophy: Ten Essays by Leo Strauss* (Wayne State University Press, 1989).

(e) のアンソロジーに収録されている「試論」は、第1部の“*What Is Political Philosophy?*,” “*On Classical Political Philosophy*,” “*The Three Waves of Modernity*,” “*An Epilogue*,” “*Natural Right and the Historical Approach*,” そして第2部の“*Plato*”である。(f) のアンソロジーの第1部には、(e) の第1部とまったく同じ5つの「試論」が収録されているが、「試論」の最後の2つの順序は入れ替っている。そして、その第2部には“*Introduction to History of Political Philosophy*”と“*Plato*”が収録され、そしてその第3部には“*Progress or Return? The Contemporary Crisis in Western Civilization*,” “*What Is Liberal Education?*,” および“*Liberal Education and Responsibility*”が収められている。

たしかに、この種のアンソロジーに利点がないわけではない。未公表の講演や、いくつかの書物に分散されて収録されている重要な論文や、入手が非常に困難な雑誌論文などを1巻に纏めた書物は、なるほど、研究者や学生にとって金銭的にも時間的にもコストを減らすことに大いに資するであろう。しかしながら、問題はアンソロジーのまさに編集方針の適否である。この点でこの編者の力量は非常に疑問である。編者によって2つのア

ンソロジーのそれぞれに注記された以下の文章がそれを如実に示しているのではないだろうか。

“The first paragraph of “What Is Political Philosophy?” has been omitted with the permission of the author.” (1975), p.xxi. (下線部分の強調は引用者のもの。以下において同様である。)

“When the essay was reprinted in the earlier edition of this volume (Hilail Gildin, ed., *Political Philosophy: Six Essays by Leo Strauss* [Indianapolis: Bobbs-Merrill Company, Inc. 1975]), the initial paragraph was omitted on the insistence of the publisher and with the permission of Leo Strauss. The paragraph is here restored.” (1989), Editor’s Note, p.2.

「政治哲学とは何であるか？」というシュトラウスの数多くの論文の中でも最も重要で最も有名な論文の1つをアンソロジーに収録するにあたり、その最初のパラグラフが「著者の許可」をもって省略されたという説明はまったく説得力がない。そのような不完全なアンソロジーの出版を誰が、なぜ、強引に推進したのか——その責任主体がそもそも曖昧である。「著者」はなぜそのような重大な省略を許可したのかの理由が書かれていない。シュトラウスがいかなる形式で（書面であるいは口述で）許可したのかも不明である。著者と編者の間だけの合意だったのか、それさえも不明である。(f) のアンソロジーの「編者の注」はわれわれのそのような疑問を増幅させるだけである。しかも今度は(e)の注記の場合とは異なり、「出版社の強調」the insistence of the publisher という「別種の圧力」が編者に不当にも加わっていた事実を思い出して、そのことを付記しているが、その insistence の内実はまったく説明されていない。したがって、その insistence がそもそも不当なものか、正当なものかを読者は判断しようがないのである。読解の仕方によっては、出版社の強調、圧力に抵抗せずに屈服したのは「レオ・シュトラウスの責任」であり、編者は師の判断（許可）に忠実に従ったまでであるという印象を読者に与えかねない。要するに、編者のこれらの注記は読者への不名誉な言い訳、弁明、言い逃れでし

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

かない。

この文脈において思い出されなければならないのは、*American Political Science Review* にマキアヴェッリの『君主論』の意図を分析した論文を60以上のパラグラフに分けて掲載したシュトラウスが、その論文を精緻化して *Thoughts on Machiavelli* の第Ⅱ章に収録したときには、『君主論』の性格を論じる13のパラグラフと、その主題を論じる13のパラグラフの合計26のパラグラフに再構成している事実であろう（26はもちろん『君主論』の章の合計の数に対応している）。シュトラウスが数 number の哲学者であるかぎり、正気のシュトラウスであったならば「政治哲学とは何であるか？」という最重要論文の先頭のパラグラフを省略あるいはむしろ削除することに同意したとはとうてい信じられないことである。内容的にみても、「啓示と理性の対立」がシュトラウスの政治哲学を活性化し続けた重要な対立軸であったかぎり、聖地イエルサレムにおいて政治哲学を擁護する講演にこの論文が基づいていたことを考慮するならば、その第1パラグラフが必要不可欠であることは誰の目にも明らかであろう。

最後に、(e) と (f) のアンソロジーの編者の注意の無さは、「政治哲学とは何であるか？」というももとの論文の3つの節のタイトルを忠実に反映していない事実にも明白である。（ちなみに『政治哲学とは何であるか？とその他の諸研究』は10の章と、16の書物についての評価を纏めた批評 Criticism とから構成されているが、節に分かれた論文は第Ⅰ章だけである。）第Ⅱ節と第Ⅲ節のタイトルはそれぞれ、*II. The Classical Solution* と *III. The Modern Solutions* と表記されている。それらとは著しい対照をなして、第Ⅰ節のタイトルは次のように2段組で表記されている。

*I. The Problem
of Political Philosophy*

3つの節のタイトルが強調的にイタリックス（斜体文字）で書かれているのは共通であるが、第Ⅰ節だけがわざわざ2段組になっており、“*The Problem*” は盲目ではない読者の眼には、政治哲学の課題がまさに政治

哲学という問題であることを、あるいは、それは政治哲学における問題 problem ないし問い question の優位の自覚にあることを、雄弁に訴えるであろう。哲学すなわち知恵を愛することは、知恵あるいは知識の所有ではなく、知恵の不断の探究、すなわち問い（問題）の優先性を前提にするのである¹⁰⁾。（何らかの理由で、たとえば、出版社の側が審美的理由を口実にもともの論文の忠実な再現を拒絶したのであれば、編者はシュトラウスのもとの節のタイトルのスタイルについて簡単にでも注記すべきであったろう。）

(3) 次に Leo Strauss and Joseph Cropsey (eds.), *History of Political Philosophy*, 3rd ed. (The University of Chicago Press, 1987) を取り上げる。筆者は近年、本書について「シュトラウス学派の共同歴史研究としての『政治哲学の歴史』」という観点から紹介しているが¹¹⁾、すでに本書の出版の翌年に『早稲田政治経済学雑誌』にかなり詳細な書評を掲載していた。その書き出しは以下の通りである。「1963年に初版が上梓されて以来、レオ・シュトラウスとジョゼフ・クロプシイによって編纂された本書は、古代ギリシアから20世紀に至る西洋政治哲学の伝統に主要な貢献をなした思想への、比類のない入門書として、高い評価を博してきた。その第2版が公刊されたのは、シュトラウスが他界する前年の1972年であったが、このたび、さらにその第3版が、かなり大幅な変更を伴って刊行された。初版が出版されてすでに4半世紀を経た今日、この種のテキストが世に問われることの意義をあらためて評価するための一助として、一方では、本書それ自体における変更した側面と、変更せざる側面とに注目しつつ、他方では、本書が置かれてきた知的・道徳的環境の変化に一瞥を与えながら、本書の簡単な紹介を行なってみよう」¹²⁾。

繰り返しを怖れずに、初版からの大きな変更点を3つだけ確認しておこう。第1に、細部における増補、修正を除けば、本書において取り上げられている思想家の数が増えたことが挙げられる。第2版ではカントの章が

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

新たに加えられた（初版でカントの章がなかったことが不思議であると思う読者・研究者がいるかもしれない）が、第3版では合計5つの章が、すなわち、トゥキユディデス、クセノフォン、フッサール、ハイデガーおよびシュトラウスについての章が新たに付け加わった。第2に、何人かの執筆者の交代があった（このような執筆者の交代はわが国で行なわれるのは稀であろう、というのも、他の条件が等しければ、以前の執筆者の名誉が傷つきかねないからである）。第2版では、聖アウグスティヌスの章と聖アキナスの章とはアーネスト・L・フォーティンによって、マキアヴェッリの章はシュトラウス自身によってそれぞれ執筆されるようになり、第3版ではバークの章がハーヴェイ・マンズフィールドによって、ベンサムとジェイムズ・ミルの章がティモシー・フラーによって、さらに、アリストテレスの章がカーネス・ロードによってそれぞれ執筆されるようになった。初版と第2版においてアリストテレスの章を担当していた大御所ハリール・V・ジャファの退場である。そして、第3に、これらの新しい章の増加と執筆者の交代の結果として、本書第3版は、初版の約790頁から、約200頁も増えている。各思想家に割り当てられている頁数は、それぞれの思想家の重要性についての編纂者たち自身の評価を反映していると思われるが、第2版まではアリストテレスに最も多くの頁数（66頁、すなわち31人の思想家を扱った初版の総頁数の約8.5パーセント）が与えられていたが、第3版では37頁に激減している。

第3版の変更の責任を1人で担うことになったクロプシイは、これらの変更に対して故人シュトラウスが一切責任を負わないことを断ったうえで、20世紀の実存主義の哲学者2人を本書に加えたことは、初版において中世のイスラーム圏やユダヤ教圏の思想家たちやデカルトを含めたことと同じように未決の問題であるとし、彼らが第一次的には政治哲学者ではないことを認めている。しかし近年における現象学の隆盛や宗教の脱私事化の世界的動向を目撃するとき、読者はむしろ2人の編者の慧眼に驚愕し、そのような決定に感謝するであろう。他方において、友人にして「師」で

もあるシュトラウスに関する章を弟子たちに執筆させて「エピローグ」という形式で本書の最後に追加した点はどのように評価されるべきであろうか¹³⁾。当然のことながら、賛否両論の沸騰は予期されたことである。しかし、大きな波紋、反響が、シュトラウス学派の外部の人びとによってではなく、その内部に属すると思われる人たち、弟子筋から、生じたことは、一部の人びとにとっては意外であったかもしれない。というのはシュトラウス学派の人びとの中にはこの第3版をシュトラウスの書物としては認知しない人たちがいるからである。ここでそのさまざまな理由を詮索する余裕はない。すでになかなか以前から、シュトラウス学派が一枚岩ではないことは周知の事実であった。それらの学派は通常、便宜的に地理的に区別されてきた、すなわち、East Coast Straussians（哲学的シュトラウス主義者たち）と West Coast Straussians（道徳的シュトラウス主義者たち）の2通りに分類されてきた¹⁴⁾。後者の代表格でもあり、エイブラハム・リンカーンの政治思想の研究者の第一人者を自認するジャファは、リンカーンの有名な演説のタイトルを彷彿させる書物を最近公刊し、シュトラウス学派の内部分裂を白日のもとに晒したのである¹⁵⁾。

けれども、政治神学的問題を自らの生涯の唯一の課題としたシュトラウスのような包括的な哲学者——理性と啓示の対立、古代人たちと近代人たちの論争、哲学と詩の対立などの根源的二者択一の前で思考した哲学者——の学派が一枚岩であることはほとんど不可能であろう。本書の第3版がシュトラウス学派の誰彼によって拒絶されようと歓迎されようとに拘わりなく、第3版の真価とその編者の力量は歴史によって、すなわち、読者によって判断されるであろう。

(4) 第4番目に取り上げるのは、*The Rebirth of Classical Political Rationalism: An Introduction to the Thought of Leo Strauss—Essays and Lectures by Leo Strauss*. Selected and Introduced by Thomas L. Pangle (The University of Chicago Press, 1989) である。本書の公刊が

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

ら僅か7年足らずで邦訳が出版されたことはシュトラウスの書物としては異例である（もちろん本書は厳密にはシュトラウスの書物ではなく、編者パングルによる1巻本の「シュトラウス選集」である）¹⁶⁾。

編者によれば、1973年にシュトラウスが他界した後、彼の影響力はたしかに増大したが、その思想をめぐる学者や知識人の中の諸論争——敵対者からの攻撃のみならず、なかんずく彼の追従者の間ですら——は日びに加熱し、辛辣さと激烈さを増すばかりであり、それらの論争の悪影響を被らずに新米の観察者や読者がシュトラウス自身の思想や書物へ新鮮に、偏見なしに直接接近するのを著しく妨げるほどである。この窮状を打開すべく、編者はシュトラウスの10本の講演や論文（既刊のものは第1章、第2章、第4章、第5章および第10章）を3部構成の書物として編むことによって、シュトラウスが格闘した諸問題——壁たち the walls——と読者を対面させ、登攀させようとする——それ以外には、それらの論争に対する安直ですぐ入手可能な答えはないとされる——。第1部は「近代合理主義の精神的危機」を、第2部は「古典的政治的合理主義」を、そして第3部は「理性と啓示の対話」をそれぞれのテーマに掲げている。たしかに、たとえば、第3章の「ハイデガーの実存主義への序論〔導入〕」という論文はシュトラウス自身の言葉でハイデガー哲学について語っている数少ない講演であるだけに、それだけをとってみても、本書は、シュトラウス自身の意図によって編まれた書物ではないが、シュトラウスに興味をもつ読者にとっては非常に有益であろう。さらにまた、中世の（政治）哲学の歴史についてのシュトラウス自身の見解をもっと良く知りたいと希う読者にとっては、たとえば第9章「いかにして中世哲学を研究し始めるか」“How to Begin to Study Medieval Philosophy”は必読の章であろう。注目すべきは、その講演の中でも——その他いろいろな箇所でも——、シュトラウスは、哲学的書物の翻訳のあり方に関して注意を促し、少なくとも3つの重大な要求を翻訳者たちに課している点である。（イ）過去の思想を可能なかぎり厳密に理解するためには、「いかに瑣末なものであれ、どんな細

部もわれわれの最も注意深い観察に値しないものとみなすことはわれわれには許されていない」。(ロ) 専門用語はきわめて重要である。(ハ) 哲学的書物の翻訳にとっては、それがこのうえなく逐語的である of utmost literalness というよりも高い褒め言葉はない。少し長くなるが、次の箇所を引用しておこう。

「私が強調しようと努力してきた論点の含意は、用語法 terminology が最も重要であるということである。ある重要な主題を指示するあらゆる用語は、1つの哲学全体を含意する。そしてまず始めに、ひとは、いずれの用語が重要であり、いずれの用語が重要ではないかに確信をもてないのであるから、ひとは読んだりするいかなる用語や、自らの表現に用いる用語にひとは最大限の注意を払う義務がある。これはわれわれをもろもろの翻訳の問題に自然に導く。[私が知っている] アラビア語からヘブライ語への、あるいはアラビア語やヘブライ語からラテン語への翻訳が大抵の近代の翻訳よりも無限に優れている、かの中世の素晴らしい翻訳者たちのラテン語法を利用するならば、ある哲学的な書物の翻訳を賞賛するのに、それが最高度の逐語訳であるということ、つまりそれが究極的逐語訳〔直訳〕 *in ultimatae literalitatis* であるということ以上の褒め言葉はない、もっとも、とりわけ彼らのラテン語はしばしば究極的羞恥 *in ultimatae turpitudinis* ではあったが。多くの近代の翻訳家が文字通りに訳出することになぜあのような迷信的恐れを懐いたのかを理解することは困難である。それは、哲学的著作の近代的翻訳に完全に依拠せざるをえないひとは、その著者の思想の精密な理解に達することはできないという帰結に導いていく。それに一致して、外国語のきわめて出来の悪い（現在語っている私のような）人間までもが、どうしても原語で読むことを余儀なくされるのである。中世においてはそうではなかった。ギリシア語の一語も知らなかった中世のアリストテレス学者たちは、ギリシア古典語についてまさに圧倒されんばかりの知識を有している近代の学者たちと比べても、アリストテレス解釈者としてははるかに

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

優越している。彼らの優越性は、中世の註釈者たちが、アリストテレスのテキストのきわめて逐語的な翻訳を自由に使い、そして彼らはそのテキストとそのテキストの専門用語にだけ集中したという事実¹⁷⁾に決定的に起因しているのである」。

ところでパンゲルは、“The selection, arrangement, and editing of the writings here assembled are entirely my responsibility and doing”と認めている。そうであるならば、第5章「ソクラテスの問題：5つの講演」中の“Socrates taught only by conversation. His art consisted in the art, or the skill, of conversation. The Greek word for the skill of conversation is dialectics” (p.139；強調は筆者のもの) という文章中の“dialectics”はギリシア語ではなく英語であるのだから、編者の責任で適切に修正すべきであっただろう。シュトラウスも、もしもこの講演を公刊しようとしたならば、その際には当然に適切な用語に修正したであろうからである。しかし、編者の側におけるこの種の怠慢はあまり罪のないそれであるのかもしれない。

(5) 残りの2つの書物は、ケネス・ハート・グリーンという卓越したユダヤ学の学者によって編集された書物であり、それらはユダヤ教思想(家たち)とシュトラウスとの関係を理解するうえできわめて重要な書物である。まず、*Jewish Philosophy and the Crisis of Modernity: Essays and Lectures in Modern Jewish Thought by Leo Strauss*. Edited with an Introduction by Kenneth Hart Green (State University of New York, 1997), xvii + 505 pages からみてみよう。本書の目次を適宜に抜き出して下に記してみたい。

Contents

Acknowledgements

Editor's Preface

Editor's Introduction: Leo Strauss as a Modern Jewish Thinker

Part I : Essays in Modern Jewish Thought

1. Progress or Return? (1952)

2.

Part II : Studies of Modern Jewish Thinkers

3.4.5.

Part III : Lectures on Contemporary Jewish Issues

6. Freud on Moses and Monotheism (1958)

7. Why We Remain Jews (1962)

Part IV : Studies on the Hebrew Bible

8.9.

Part V : Comments on Jewish History

10. What Is Political Philosophy? [The First Paragraph] (1954)

11.12.

Part VI : Miscellaneous Writings on Jews and Judaism

13.14.

Part VII : Autobiographical Reflections

15.16.17.

Appendix 1.2.3.

まず第1に指摘されるべきは、本書（およびケネス・ハート・グリーン）のわが国における影響の大きさである。極論すれば、もしも本書が出版されなかったならば、長尾龍一『争う神々』の中のシュトラウス論も、柴田寿子『リベラル・デモクラシーと神権政治——スピノザからレオ・シュトラウスまで——』（東京大学出版会、2009年）も、『思想』（2008年、10月）No. 1014の「レオ・シュトラウスの思想」特集号も出版されなかったであろう、あるいは少なくともそれらが現在ある形では出版されていなかったであろうと思われる。

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

たとえば、本書の第6番目に収録されたシュトラウスのフロイト論を読んだ長尾は、学問と科学を擁護すべく、宗教者シュトラウスを次のように激しく糾弾する。「シュトラウスはフロイトに哲学的基礎がないという。しかしこれは、宗教と哲学を混同しているのではないか。哲学は『知の愛』であり、認識にタブーを課し、宗教現象の歴史的・心理学的研究を宗教の権威によって圧殺しようとするシュトラウスが『哲学』を云々することは『片腹痛い』というべきである」。「シュトラウスは弱き1人のユダヤ系知識人に過ぎない。それは学問にとって幸せなことである。彼が中世の異端審問官のような権力をもったら、少なくとも彼の『目のかたき』であるユダヤ教を離れたユダヤ系知識人たちは、焚殺刑を免れないであろう」¹⁸⁾。あるいはまた、「レオ・シュトラウスとイスラーム政治思想」を論じる者が、なぜ「我々はユダヤ人ではない」とわざわざ彼自身の単著論文に書き込まなければならないのか¹⁹⁾、理解に苦しむ。いずれにしても、グリーン編集した本書は、わが国のアカデミズムの世界において、宗教人シュトラウス像を広めたり、あるいはシュトラウスのユダヤ人性を強調するに与って力があつたことは確かであろう。

もちろん本書の美点、評価できる点は多くあるが（たとえば、第10番目に“*What Is Political Philosophy?*”の第1パラグラフ [まさにギルデインによって省略された非常に重要な部分] だけを収録している点も含めて）、ここでは問題点に、つまり、読者が警戒すべき点に注意を促したい。それは、第7番目に収録されている非常に有名で論争的なシュトラウスの講演のフル・タイトルに関係する問題である。ここでの問題点をより明瞭にするために、本書よりも3年前に出版された、*Leo Strauss: Political Philosopher and Jewish Thinker*, edited by Kenneth L. Deutsch and Walter Nicgorski (Rowman & Littlefield, 1994) と本書とをいくつかの点で比較してみよう。『レオ・シュトラウス：政治哲学者にしてユダヤ思想家』は次の献辞を掲げている。

To the memory of Leo Strauss
*In appreciation of his achievement in reviving political philosophy in
political science and in clarifying the encounter between
Jerusalem and Athens*

さて本書の内容は、第1部「Strauss: Judaism, Reason, and Revelation」と第2部「Strauss: Classical Political Philosophy, Modernity, and the American Regime」から構成され、それぞれの部に8名の著名な学者によるシュトラウスの多面性の一端に切り込む論文が掲載されている。それらとは別に、ひととき注目を引くのが、第1部の最初に置かれているLeo Straussによる講演“Why We Remain Jews: Can Jewish Faith and History Still Speak to Us?”である。

ドイチュとニクゴースキの編集になる本とグリーンンの編集になる本とを比べると、編集の観点について言えば、明らかに前者がシュトラウスを政治（哲学）と神学（宗教）との間にバランスよく配置しているように見えるのに対して、後者は明らかにシュトラウスをユダヤ教思想家（啓示）の側に強引に引きつけようという意図が编者にあることをうかがわせる。しかし今われわれが重大な関心を払っている問題は、シュトラウスの講演の正式なタイトルはどちらかという問題である。一言でいえば、サブ・タイトル“Can Jewish Faith and History Still Speak to Us?”はその講演の一部であったのか否かの問題である。

この講演の司会者を勤め、講演者を紹介したクロプシイも、その最初の発言において、この講演は奇妙なタイトル a strange title をもっており、しかもそのタイトルは、一方においては狭い narrow ように現れるが同時に他方においては大胆である bold ように現れると指摘している。そのタイトルが狭いように見えるのは、それが明らかにユダヤの民だけを聴衆として想定しているからである。しかし、もしも人びとが近代科学と近代の政治生活におけるいくつかの展開を考慮するならば、この問い“why we

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

remain Jews”は、ユダヤ人たちだけに向けられたものではなく、あらゆる宗教的確信をもつ人びとに向けられた問いである、とクロプシイは述べて、このタイトルの大胆さを示唆している。さらに彼は続けて、この問題について講演する人びとは、若干の変更を加えるや、単に1人のユダヤ人だけでなく、(宗教に関係なく?)あらゆるひとの精神 mind の中に生じるであろう、“why anybody should remain anything that he happens to be to begin with”という問いについて語ることになるだろうと述べている。

講演者シュトラウス自身は、他方において、講演の冒頭で2つの序言的発言をしている。第1の論点は、彼は2、3日前までこの講演のサブ・タイトルについては知らされていなかったとし、彼は次のように聴衆に訴えた。“... I must say that to the extent that I prepared this paper, I prepared it on the assumption that I was going to speak on the subject: ‘Why do we remain Jews?’”シュトラウスによれば、結局のところ、あらゆるひとは専門家であり、彼自身の専門は divinity ではなく社会科学であるから、彼は当日のフル・タイトルではその主題について適切には語ることはできない。彼の同僚の社会学者たちが彼とはいろいろな点で意見を異にしようとも、社会科学は、低い low ものではあっても堅固な solid 諸事実から出発し、可能なかぎりその地盤に留まらなければならないという社会科学の性質については同意するであろう、と述べた後で、シュトラウスは第1の論点を次のように締め括る。“No flights of fancy, no scientific fiction, no metaphysics will enter. That is clear.”第2の論点は、そのような怒り、憤慨、憤りにも拘らず、シュトラウスがこの講演をキャンセルしなかった理由である。彼は次のように述べている。“But nevertheless I did not cancel the lecture because I thought I am prepared, if not for this lecture, then for this subject. I believe I can say, without any exaggeration, that since a very, very early time the main theme of my reflections has been what is called ‘the Jewish question.’”

講演の聴衆の大部分がサブ・タイトルを含むタイトルのもとにシュトラ

ウスが講演することを期待して集まったのは事実であろう。そのことを承知でシュトラウスは講演を行ったであろう。彼が拒絶したサブ・タイトルは彼の当日の講演にいささかも影響を与えなかったのであろうか。いずれにしても、シュトラウスの講演の正式なタイトルは何であったのかという疑問が残るのである。歴史的精確さにかかわる問題である。

ところで、もしもこの講演会の主催者がシュトラウスに “Why do [or should] I remain a Jew?” というタイトルで講演することを依頼していたならば、彼はそれを引き受けたであろうか。(前に紹介したクロプシイの “why anybody should remain anything that he happens to be to begin with” という文章は、何らかの集団としての「われわれ」ではなく、1人の個人の実存的問いの次元を明確に指し示しているであろう。しかも重要な点は、クロプシイがその講演のタイトルの大胆さを敷衍する過程で “should” という語を用いているのに、‘Why do we remain Jews?’ というタイトルで講演をする準備をしてきたと述べるシュトラウス自身は慎重にその語を避けているように思われる。) 筆者としては、シュトラウスがそのような講演を引き受けることにはきわめて懐疑的である。ここでも「われわれ」と「私」の差異に敏感である必要がある。「われわれ」という用語はきわめて曖昧な用語である。

(6) 最後に、*Leo Strauss on Maimonides: The Complete Writings*. Edited with an Introduction by Kenneth Hart Green (The University of Chicago Press, 2013), XXXV + 654 pages を取り上げる。本書の内容は大きく4つに分けられる。90頁弱の長大な編者の序論「マイモニデスについてのレオ・シュトラウスの諸試論と諸講演」の後に、3部構成の本論が続いている。第I部「出発点：なぜ中世の思想家たちを研究するのか」(How to Study Medieval Philosophy (1944)、第II部「マイモニデスについて」、および第III部「最後の中世のマイモニデス主義者、アイザック・アブラヴァネルについて」(On Abravanel's Philosophical Tendency and

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

Political Teaching (1937) がそれらである。第Ⅰ部と第Ⅲ部にはここに英語で記されたタイトルをもつシュトラウスの講演あるいは論文が1本ずつ掲載されているが、第Ⅱ部にはシュトラウスのマイモニデス論が時系列的に古いものから13本掲載されている。本書は2013年に出版されたばかりであり、筆者はまだその全体像を把握できていない。ここでは第8番目の論文に編者が“The Literary Character of *The Guide of the Perplexed*”というタイトルを付けていることの問題点だけを指摘しておきたい。

たしかに、生前のシュトラウスは、マイモニデスの主著がシカゴ大学出版(1963年)からシュローモ・ピネスによって翻訳されて、Moses Maimonides, *The Guide of the Perplexed*として刊行された折に、4半世紀に及ぶその著書についての彼自身の研究成果である、“How to Begin to Study *The Guide of the Perplexed*”というタイトルの序論的論文をその翻訳の前に付した。しかし、シュトラウス自身が1巻に纏めて刊行した『迫害と著述の技法』の第3章のタイトルは“The Literary Character of the *Guide for the Perplexed*”であった。

たとえシュトラウスのマイモニデス論をすべて編集して、それらに詳細な注を施したK・H・グリーンの仕事がさまざまな点で非常に高く評価されうるものだとしても、このようなタイトルの変更は編者の越権行為ではないであろうか。編者は、晩年のシュトラウスが(*The*) *Guide for the Perplexed*というタイトルの表記の仕方よりも*The Guide of the Perplexed*のそれを好んでいたhas preferredという点を、彼の編集方針の決定的な要因としているようであるが、まったく説得力がないと思われる。問題点は“The Literary Character of *The Guide of the Perplexed*”というタイトルの論文をシュトラウスが出版したか否かである。再びhistorical exactnessの問題である。博学のハートはシュトラウスの直弟子ではなくブルームらの弟子である、すなわち、シュトラウスの孫弟子にあたる²⁰⁾。

3. 結 論

レオ・シュトラウスは現代における政治哲学の復権に寄与した思想家の1人として高く評価される一方で、21世紀の米国の neo-conservatism の思想的淵源として強く批判されている。しかし、そもそも「師」は「弟子たち」を学問的営為、哲学においてどの程度コントロールできるのだろうか。シュトラウスの死後において、彼が生前関与した著述や講演や書簡などが弟子たち（や弟子たちの弟子たち）によって編集され公刊され続けているが、それらは彼自身の意図にどれほど適うものであろうか。

一般論として言えば、編者たちのさまざまな貢献はまた、もともとの著者やテキストと読者たちとの間に横たわる障碍ともなりうる危険を伴っているであろう。なるほど「弟子」たちの中から、「師」の著作のある特定の側面に良く通じ、彼が言及したり暗示したりした事柄について最新かつ該博な知識をもつようになる学究も出てくるかもしれない。しかし、彼らが提供する「師」に関連する事柄の有益と思われる情報の洪水に溺れないように、読者の側では十分に賢慮を発揮する必要があるかもしれない。というのも著者の寡黙や沈黙には意味があるかもしれないのである。講演を活字にしないでおくことも含めて……。

本稿においては、シュトラウスの場合をケース・スタディにして、「弟子たち」による「師」の著作や講演や書簡の編集・出版活動の英語圏における6つの事例のささやかな検討を通して、この問題への接近を試みた。この検討が明るみに出した点は、とくに4種類の『僭主政治について』の編集と出版や、近代のユダヤ思想、なかんずく近代のマイモニデス主義の中にシュトラウスを位置づけようとしたりする後継者たちの出版・著述活動などは、シュトラウス本人の小さな貴重な声よりも編集者（たち）自身の自己主張が強すぎるような印象をわれわれに与えるという点である。

本稿の性質は、したがって、philosophical な論稿ではないが、たとえ philological な論稿とまでは言えないまでも、少なくとも literary な論稿

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

であるとは言えるであろう。

注

- 1) 本稿は「第23回政治哲学研究会」(2013年9月14日、北海道大学)における報告「師は弟子たちをコントロールできるか?:レオ・シュトラウスの場合」を大幅に修正・増補したものである。忌憚のないコメントを寄せられた参加者の皆様に感謝する。なお、本稿は横書きのメリットを最大限活用すべく、引用した文章においても数詞は漢数字に代えてアラビア数字を用いたことをお断りする。引用された人びとの寛恕をお願いする次第である。
- 2) William E. Connolly, *Pluralism* (Duke University Press, 2005).
- 3) 「訳者あとがき」、杉田敦ほか訳『ブルーリズム』岩波書店、2008年、287頁。
- 4) John A. Murley and John E. Alvis (eds.), *Willmoore Kendall: Maverick of American Conservatives* (Lexington Books, 2002), 263-265. Cf. also *American Political Science Review* (September 1967), 783-784. なお、わが国の近年におけるケンドールの政治思想研究としては、井上弘貴「ウィルモア・ケンドールのロック読解について——『ジョン・ロックの多数派支配の原理』(1941年)と「ジョン・ロック再訪」(1966年)を中心に——』『政治哲学』(2012年、2月)第12号、105-122が興味深い。
- 5) Leo Strauss, *What Is Political Philosophy? and Other Studies* (The University Chicago Press, 1988), 114-115. 西永亮訳「クセノフォンの『ヒエロン』についての再陳述」『政治哲学とは何であるか?とその他の諸研究』(早稲田大学出版部、2014年)。
- 6) 因みに、Leo Strauss, *Über Tyrannis: Eine Interpretation von Xenophons >Hieron< mit einem Essay über Tyrannis und Weisheit von Alexandre Kojève* (Hermann Luchterhand Verlag, 1963) には、「索引」Registerがあり、NamensverzeichnisとSachverzeichnisとにわかれている。1948年の英語版 *On Tyranny* には「目次」には表示されていないが、INDEXが121頁にあり、52項目(サムエル書下とペトロの第1の手紙を除く50項目は人名である)が載っている。コーネル版(Second Printing 1975)のINDEXには、69項目が載っているが、1948年版では採られていた項目が削除されている場合もあり(Kantなど)、INDEXの情報は非常に興味深い。

- 7) 直前の注で触れたドイツ語版『僭主政治について』においてもマコーレイからの引用は掲載されていない。ドイツ語版の最後の言葉は何であろうか。“Der Anbruch des universalen und einheitlichen Staates bedeutet das Ende der Philosophie auf Erden...” “Erden” か “...” か。
- 8) Leo Strauss, *Persecution and the Art of Writing* (The Free Press, 1952), esp., 78-94. シュトラウスはファーラービーの政治哲学を解釈をするうえでも、ファーラービーの2つの異なった著作における人称代名詞の注意深い使い分けに留意を払っている。「ファーラービーが『要約』においてはかなり頻繁に触れているけれども、『プラトンの哲学』においては触れていないもう1つの主題がある。『プラトンの哲学』において彼は決して彼自身に触れていない。彼はその作品において「われわれに us」について3度語っているが、しかし彼はそこにおいてその表現で「われわれ人間存在たちに us human beings」 (§§ 8-9) を意味している。『要約』においては、しかしながら、もしも私が間違っていないならば、彼は彼自身について単数形では5度、複数形では21度語っている。『要約』が『プラトンの哲学』よりも「個人的 personal」であると言われるかもしれないのはまさに主にこの理由からである」。Leo Strauss, “How Fārābī Read Plato’s Laws,” in *What Is Political Philosophy? and Other Studies*, 140. 拙訳、「いかにしてファーラービーはプラトンの『法律』を読んだか」(早稲田大学出版部、2014年)。
- 9) Leo Strauss, *On Tyranny*, Revised and Expanded Edition, Including the Strauss-Kojève Correspondence, Edited by Victor Gourevitch and Michael S. Roth (The University of Chicago Press, 2000), 180. 石崎嘉彦訳「クセノフォン『ヒエロン』についての再説」『僭主政治について』(下)(現代思潮新社、2007年、89-90頁)；Leo Strauss, *What Is Political Philosophy? and Other Studies* (The University of Chicago Press, 1988), 98. 西永亮訳「クセノフォンの『ヒエロン』についての再陳述」『政治哲学とは何であるか？とその他の諸研究』(早稲田大学出版部、2014年)。
- 10) 「マキアヴェッリの教えにかんするわれわれの批判的研究が究極的に目的とするのは、恒久的諸問題の回復 the recovery of the permanent problems に向けて貢献することにほかならない」。Leo Strauss, *Thoughts on Machiavelli* (The University of Chicago Press, 1958), 14. 飯島昇藏、厚見恵一郎、村田玲訳『哲学者マキアヴェッリについて』(勁草書房、2011年)、7頁。シュトラウス

哲学において師は弟子をどの程度までコントロールできるか

のこの言葉もまた、(政治) 哲学における問いなし問題の優先性を表現しているであろう。

- 11) 拙稿「レオ・シュトラウスと政治哲学の歴史」田中浩編『思想学の現在と未来』(未来社、2009年)、177-197頁。
- 12) 拙評「レオ・シュトラウス、ジョゼフ・クロプシ編『政治哲学の歴史』第3版」『早稲田政治経済学雑誌』(1988年)、第294号、115頁。115-120頁に全文が掲載されている。
- 13) Nathan Tarcov and Thomas L. Pangle, "EPILOGUE: Leo Strauss and the History of Political Philosophy," in Leo Strauss and Joseph Cropsey (eds.), *History of Political Philosophy*, 3rd ed., (The University of Chicago Press, 1987), 907-938. 拙訳、ネイサン・タルコフ / トーマス・L・パングル「レオ・シュトラウスと政治哲学の歴史」と「訳者解題」『思想』(2013年、6月)、第1070号、25-64頁を参照せよ。
- 14) このような2分法に対抗して、アラン・ブルームやクロプシの弟子でもあるマイケル・ズッカートはその婦人との共著の中で Midwest Straussians という、シュトラウス学派内部の第3の集団の存在を強調した。Cf. Catherine and Michael Zuckert, *The Truth About Leo Strauss: Political Philosophy and American Democracy* (The University of Chicago Press, 2006), ch.7.
- 15) Harry V. Jaffa et al. *Crisis of the Strauss Divided: Essays on Leo Strauss and Straussianism, and East and West* (Lanham: Rowman & Littlefield, 2012). 本書の書評論文としては、井上弘貴「分かれたレオ・シュトラウスの危機」『政治哲学』(2013年、9月)第15号、146-153を参照せよ。
- 16) 石崎嘉彦監訳『古典的政治的合理主義の再生——レオ・シュトラウス思想入門——』(ナカニシヤ出版、1996年)。
- 17) Leo Strauss, *The Rebirth of Classical Political Rationalism: An Introduction to the Thought of Leo Strauss—Essays and Lectures by Leo Strauss*. Selected and Introduced by Thomas L. Pangle (The University of Chicago Press, 1989), 220. 石崎嘉彦監訳、287-288頁。ただし、「私が知っている I know」というフレーズの挿入は、*Leo Strauss on Maimonides: The Complete Writings*, 109から採用した。
- 18) 長尾龍一「シュトラウスのフロイト論」『争う神々』(信山社叢書、1998年)、282-283頁。

- 19) 『思想』 No.1014、91 頁。
- 20) 本書は Emil Fackenheim, Allan Bloom, Marvin Fox, Alexander Altmann という 4 人の偉大な教師の思い出に捧げられている。なお、注意深い読者は、本稿における本書の簡単な内容紹介を見ただけでも、パンゲルによって 1989 年に編集された、1944 年のシュトラウスによるまったく同一の講演が、本書には “How to Study Medieval Philosophy” という別のタイトルで所収されている事実にびっくりするかもしれない。パンゲル版はその後、David Bolotin, Christopher Bruell および Thomas L. Pangle の編集によって *Interpretation* 23, no. 3 (Spring 1996): 321-338 に “How to Study Medieval Philosophy” として掲載された。ハートは本書において、3 つの版を差別化するために、既刊の 2 つの版をそれぞれ “HBSMP” (1989)、“HSMP” (1996) として表記し、そして自身の編集した版を “How to Study Medieval Philosophy” として表記しているが、いささか複雑である。時間的に後に編集された版のテープお越しや、注記などがそれ以前の版よりも優れているように見えるのは当然だとしても、編者の注それ自体にシュトラウスは責任を負えないし、夥しい数の注は怠惰な読者には有益であろうが、1 人で思索しようとする真剣な読者の関心を本文から逸らしかねない側面もあるように思われる。